



DRESDNER PHILHARMONIE

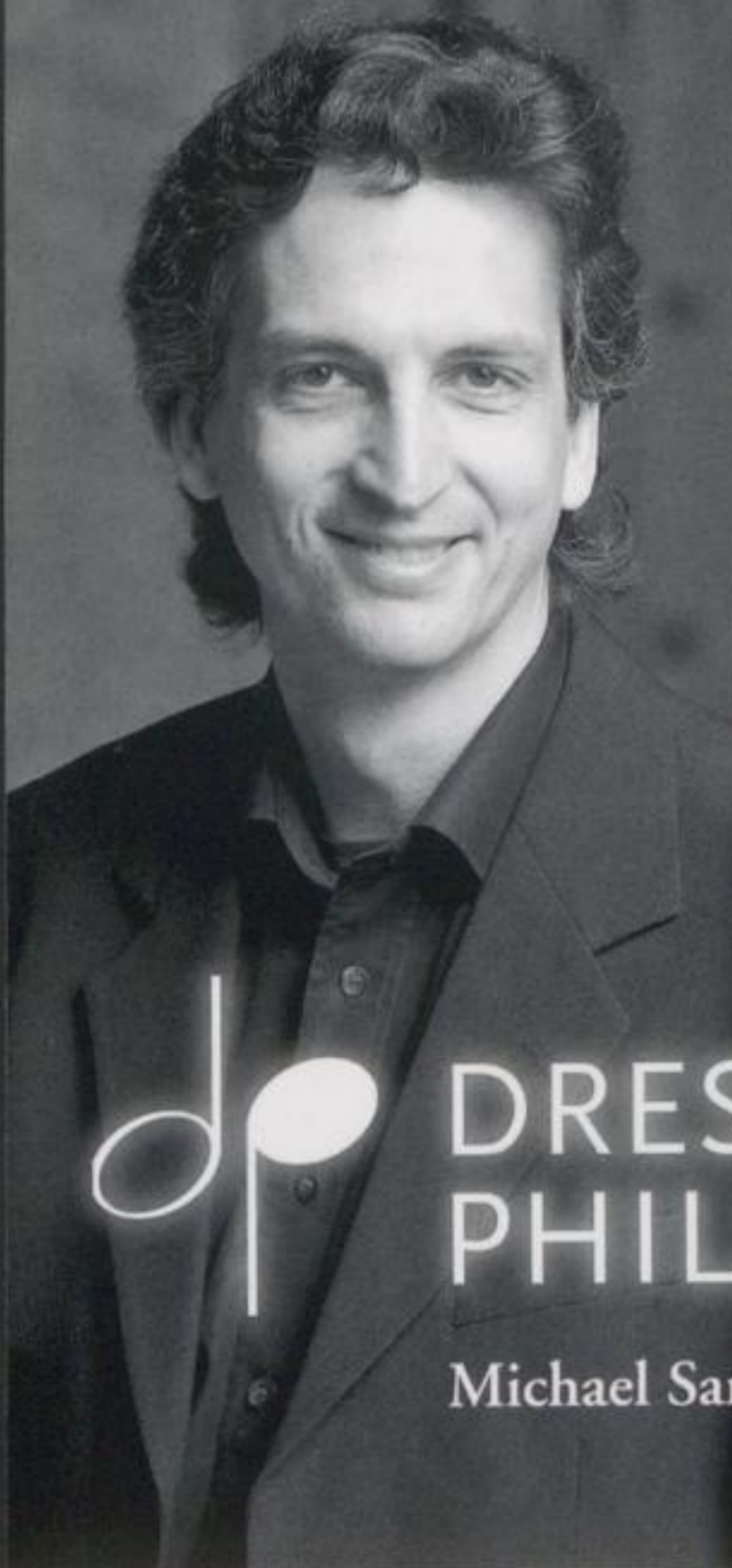
Michael Sanderling, *Chefdirigent*

ドレスデン・フィルハーモニー管弦楽団

首席指揮者: ミハエル・ザンデルリンク

2013年 日本公演

2013年 日本公演



DRESDNER PHILHARMONIE

Michael Sanderling, *Chefdirigent*

©Marco Borggreve

ドレスデン・フィルハーモニー管弦楽団
首席指揮者:ミヒャエル・ザンデルリンク



ドレスデン・ フィルハーモニー 管弦楽団

2013年日本公演 スケジュール

Dresdner Philharmonie
Japan tour 2013 Schedule

6.20 [木] 19:00 岩国
山口県民ホールいわくに シンフォニア岩国 コンサートホール

June 20 Thu. 19:00 Iwakuni Sinfonia Iwakuni, Concert Hall

主催:シンフォニア岩国、指定管理者サントリーパブリシティサービスグループ、tys テレビ山口

ベートーヴェン:「エグmont」序曲 Op.84

L. v. Beethoven: Overture from "Egmont", Op.84

ベートーヴェン:ピアノ協奏曲第5番 変ホ長調 Op.73「皇帝」 (ピアノ:上原彩子)

L. v. Beethoven: Piano Concerto No.5 in E-flat major, Op.73 "Emperor" (Piano: Ayako Uehara)

第1楽章:アレグロ

1st Mov.: Allegro

第2楽章:アダージョ・ウン・ポーコ・モッソ

2nd Mov.: Adagio un poco mosso

第3楽章:ロンド、アレグロ

3rd Mov.: Rondo. Allegro

ブラームス:交響曲第1番 八短調 Op.68

J. Brahms: Symphony No.1 in C minor, Op.68

第1楽章:ウン・ポーコ・ソステヌート — アレグロ

1st Mov.: Un poco sostenuto — Allegro

第2楽章:アンダンテ・ソステヌート

2nd Mov.: Andante sostenuto

第3楽章:ウン・ポーコ・アレグレット・エ・グラツィオーソ

3rd Mov.: Un poco allegretto e grazioso

第4楽章:アダージョ — ビウ・アンダンテ

4th Mov.: Adagio — Più andante

— アレグロ・ノン・トロッポ・マ・コン・ブリオ

— Allegro non troppo ma con brio

DRESDNER PHILHARMONIE

6.21

[金] 19:00 武蔵野
武蔵野市民文化会館 大ホール

June 21 Fri. 19:00 Musashino Musashino Civic Cultural Hall, Main Hall

主催:公益財団法人武蔵野文化事業団

ベートーヴェン:交響曲第6番 へ長調 Op.68「田園」

L. v. Beethoven: Symphony No.6 in F major, Op.68 "Pastoral"

第1楽章:「田舎に着いた時に目覚める喜ばしい快活な気分」
アレグロ・マ・ノン・トロッポ

1st Mov.: Angenehme, heitere Empfindungen,
welche bei der Ankunft auf dem Lande im Menschen erwachen.
Allegro ma non troppo

第2楽章:「小川のほとりの情景」
アンダンテ・モルト・モト

2nd Mov.: Szene am Bach.
Andante molto moto

第3楽章:「田舎の人々の楽しい集い」
アレグロ

3rd Mov.: Lustiges Zusammensein der Landleute.
Allegro

第4楽章:「雷雨、嵐」
アレグロ

4th Mov.: Donner. Sturm.
Allegro

第5楽章:「牧人の歌。
嵐の後の神への感謝に結び付いた慈愛の気持ち」
アレグレット

5th Mov.: Hirtengesang. Wohltätige,
mit Dank an die Gottheit verbundene Gefühle nach dem Sturm.
Allegretto

ベートーヴェン:交響曲第5番 八短調 Op.67「運命」

L. v. Beethoven: Symphony No.5 in C minor, Op.67

第1楽章:アレグロ・コン・ブリオ

1st Mov.: Allegro con brio

第2楽章:アンダンテ・コン・モト

2nd Mov.: Andante con moto

第3楽章:アレグロ

3rd Mov.: Allegro

第4楽章:アレグロ

4th Mov.: Allegro

6.22

[土] 15:00 東京
江戸川区総合文化センター 大ホール

June 22 Sat. 15:00 Tokyo Edogawa-ku Sogo Bunka Center

主催:江戸川区、江戸川区総合文化センター指定管理者サントリーパブリシティサービスグループ

ベートーヴェン:「エグmont」序曲 Op.84

L. v. Beethoven: Overture from "Egmont", Op.84

ベートーヴェン:ピアノ協奏曲第5番 変ホ長調 Op.73「皇帝」 (ピアノ:上原彩子)

L. v. Beethoven: Piano Concerto No.5 in E-flat major, Op.73 "Emperor" (Piano: Ayako Uehara)

第1楽章:アレグロ

1st Mov.: Allegro

第2楽章:アダージョ・ウン・ポーコ・モッソ

2nd Mov.: Adagio un poco mosso

第3楽章:ロンド、アレグロ

3rd Mov.: Rondo. Allegro

ベートーヴェン:交響曲第7番 イ長調 Op.92

L. v. Beethoven: Symphony No.7 in A major, Op.92

第1楽章:ポーコ・ソステヌート — ヴィヴァーチェ

1st Mov.: Poco sostenuto — Vivace

第2楽章:アレグレット

2nd Mov.: Allegretto

第3楽章:プレスト

3rd Mov.: Presto

第4楽章:アレグロ・コン・ブリオ

4th Mov.: Allegro con brio

6.23

[日] 15:00 所沢

所沢市民文化センター ミューズ アークホール

June 23 Sun. 15:00 Tokorozawa Tokorozawa Civic Cultural Center MUSE ARK HALL

主催:公益財団法人所沢市文化振興事業団、ジャパン・アーツ

ベートーヴェン:交響曲第6番 へ長調 Op.68「田園」

L. v. Beethoven: Symphony No.6 in F major, Op.68 "Pastoral"

第1楽章:「田舎に着いた時に目覚める喜ばしい快活な気分」
アレグロ・マ・ノン・トロッポ

第2楽章:「小川のほとりの情景」
アンダンテ・モルト・モート

第3楽章:「田舎の人々の楽しい集い」
アレグロ

第4楽章:「雷雨、嵐」
アレグロ

第5楽章:「牧人の歌。
嵐の後の神への感謝に結び付いた慈愛の気持ち」
アレグレット

1st Mov.: Angenehme, heitere Empfindungen,
welche bei der Ankunft auf dem Lande im Menschen erwachen.
Allegro ma non troppo

2nd Mov.: Szene am Bach.
Andante molto moto

3rd Mov.: Lustiges Zusammensein der Landleute.
Allegro

4th Mov.: Donner. Sturm.
Allegro

5th Mov.: Hirtengesang. Wohltätige,
mit Dank an die Gottheit verbundene Gefühle nach dem Sturm.
Allegretto

ベートーヴェン:交響曲第5番 八短調 Op.67「運命」

L. v. Beethoven: Symphony No.5 in C minor, Op.67

第1楽章:アレグロ・コン・ブリオ

第2楽章:アンダンテ・コン・モート

第3楽章:アレグロ

第4楽章:アレグロ

1st Mov.: Allegro con brio

2nd Mov.: Andante con moto

3rd Mov.: Allegro

4th Mov.: Allegro

6.25

[火] 19:00 東京

サントリーホール

June 25 Tue. 19:00 Tokyo Suntory Hall

主催:ジャパン・アーツ

ベートーヴェン:交響曲第7番 イ長調 Op.92

L. v. Beethoven: Symphony No.7 in A major, Op.92

第1楽章:ポーコ・ソステヌート — ヴィヴァーチェ

第2楽章:アレグレット

第3楽章:プレスト

第4楽章:アレグロ・コン・ブリオ

1st Mov.: Poco sostenuto — Vivace

2nd Mov.: Allegretto

3rd Mov.: Presto

4th Mov.: Allegro con brio

ブラームス:交響曲第1番 八短調 Op.68

J. Brahms: Symphony No.1 in C minor, Op.68

第1楽章:ウン・ポーコ・ソステヌート — アレグロ

第2楽章:アンダンテ・ソステヌート

第3楽章:ウン・ポーコ・アレグレット・エ・グラツィオーソ

第4楽章:アダージョ — ビウ・アンダンテ
— アレグロ・ノン・トロッポ・マ・コン・ブリオ

1st Mov.: Un poco sostenuto — Allegro

2nd Mov.: Andante sostenuto

3rd Mov.: Un poco allegretto e grazioso

4th Mov.: Adagio — Più andante
— Allegro non troppo ma con brio

DRESDNER PHILHARMONIE

6.26

[水] 19:00 東京

東京オペラシティコンサートホール

June 26 Wed. 19:00 Tokyo Tokyo Opera City Concert Hall

主催: ジャパン・アーツ

ベートーヴェン: 「エグmont」序曲 Op.84

L. v. Beethoven: Overture from "Egmont", Op.84

メンデルスゾーン: ヴァイオリン協奏曲 ホ短調 Op.64

(ヴァイオリン: 川久保賜紀)

F. Mendelssohn: Violin Concerto in E minor, Op.64

(Violin: Tamaki Kawakubo)

第1楽章: アレグロ・モルト・アパッシオナート

1st Mov.: Allegro molto appassionato

第2楽章: アンダンテ

2nd Mov.: Andante

第3楽章: アレグレット・ノン・トロッポ

3rd Mov.: Allegretto non troppo

— アレグロ・モルト・ヴィヴァーチェ

— Allegro molto vivace

ベートーヴェン: ピアノ協奏曲第5番 変ホ長調 Op.73 「皇帝」 (ピアノ: 上原彩子)

L. v. Beethoven: Piano Concerto No.5 in E-flat major, Op.73 "Emperor" (Piano: Ayako Uehara)

第1楽章: アレグロ

1st Mov.: Allegro

第2楽章: アダージョ・ウン・ポコ・モッソ

2nd Mov.: Adagio un poco mosso

第3楽章: ロンド、アレグロ

3rd Mov.: Rondo. Allegro

6.27

[木] 18:15 東京

昭和女子大学人見記念講堂 (学校公演・非公開)

June 27 Thu. 18:15 Tokyo Showa Woman's University Hitomi Memorial Hall

主催: 学校法人 昭和女子大学

ベートーヴェン: 「エグmont」序曲 Op.84

L. v. Beethoven: Overture from "Egmont", Op.84

ベートーヴェン: ピアノ協奏曲第5番 変ホ長調 Op.73 「皇帝」 (ピアノ: 上原彩子)

L. v. Beethoven: Piano Concerto No.5 in E-flat major, Op.73 "Emperor" (Piano: Ayako Uehara)

第1楽章: アレグロ

1st Mov.: Allegro

第2楽章: アダージョ・ウン・ポコ・モッソ

2nd Mov.: Adagio un poco mosso

第3楽章: ロンド、アレグロ

3rd Mov.: Rondo. Allegro

ベートーヴェン: 交響曲第5番 八短調 Op.67 「運命」

L. v. Beethoven: Symphony No.5 in C minor, Op.67

第1楽章: アレグロ・コン・ブリオ

1st Mov.: Allegro con brio

第2楽章: アンダンテ・コン・モート

2nd Mov.: Andante con moto

第3楽章: アレグロ

3rd Mov.: Allegro

第4楽章: アレグロ

4th Mov.: Allegro

6.28 [金] 19:00 奈良
奈良県文化会館 国際ホール

June 28 Fri. 19:00 Nara Nara Prefectural Cultural Hall

主催:ムジークフェストなら実行委員会、奈良県

ベートーヴェン:「エグmont」序曲 Op.84

L. v. Beethoven: Overture from "Egmont", Op.84

メンデルスゾーン:ヴァイオリン協奏曲 ホ短調 Op.64 (ヴァイオリン:川久保賜紀)
F. Mendelssohn: Violin Concerto in E minor, Op.64 (Violin: Tamaki Kawakubo)

第1楽章:アレグロ・モルト・アパッシオナート
第2楽章:アンダンテ
第3楽章:アレグレット・ノン・トロppo
—アレグロ・モルト・ヴィヴァーチェ

1st Mov.: Allegro molto appassionato
2nd Mov.: Andante
3rd Mov.: Allegretto non troppo
— Allegro molto vivace

ベートーヴェン:交響曲第5番 八短調 Op.67「運命」

L. v. Beethoven: Symphony No.5 in C minor, Op.67

第1楽章:アレグロ・コン・ブリオ
第2楽章:アンダンテ・コン・モート
第3楽章:アレグロ
第4楽章:アレグロ

1st Mov.: Allegro con brio
2nd Mov.: Andante con moto
3rd Mov.: Allegro
4th Mov.: Allegro

6.29 [土] 14:00 大阪
ザ・シンフォニーホール

June 29 Sat. 14:00 Osaka The Symphony Hall

主催:朝日放送 協賛:ヒガシマル醤油

ベートーヴェン:交響曲第7番 イ長調 Op.92

L. v. Beethoven: Symphony No.7 in A major, Op.92

第1楽章:ポーコ・ソステヌート — ヴィヴァーチェ
第2楽章:アレグレット
第3楽章:プレスト
第4楽章:アレグロ・コン・ブリオ

1st Mov.: Poco sostenuto — Vivace
2nd Mov.: Allegretto
3rd Mov.: Presto
4th Mov.: Allegro con brio

ブラームス:交響曲第1番 八短調 Op.68

J. Brahms: Symphony No.1 in C minor, Op.68

第1楽章:ウン・ポーコ・ソステヌート — アレグロ
第2楽章:アンダンテ・ソステヌート
第3楽章:ウン・ポーコ・アレグレット・エ・グラツィオーソ
第4楽章:アダージョ — ピウ・アンダンテ
— アレグロ・ノン・トロppo・マ・コン・ブリオ

1st Mov.: Un poco sostenuto — Allegro
2nd Mov.: Andante sostenuto
3rd Mov.: Un poco allegretto e grazioso
4th Mov.: Adagio — Più andante
— Allegro non troppo ma con brio

後援:ドイツ連邦共和国大使館



ドイツ文化センター



協力:ユニバーサルミュージック、エイベックス・クラシックス

ミハエル・ザンデルリンク (首席指揮者)
 Michael Sanderling, *Principal Conductor*

ミハエル・ザンデルリンクはベルリンに生まれ、同地で教育を受けた。チェリストとして成功を収めた後、指揮者へ転向。2005年、ドレスデン・フィルハーモニー管弦楽団に指揮者としてデビューした後、同楽団と集中的に共演を重ねた期間を経て、2011/12年シーズンより首席指揮者に就任した。

2006年から2010年までは、ポツダム・カンマーアカデミーの芸術監督兼首席指揮者を務め、世界各地のコンサートホールに登場。また同アンサンブルとはいくつかのCD録音も行っており、そのひとつには、ソニー・クラシカルでのショスタコーヴィチの「室内交響曲集」がある。

彼はこれまでに、チューリッヒ・トーンハレ管弦楽団、バイエルン放送交響楽団、ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団、ドレスデン国立歌劇場管弦楽団、ベルリン・コンツェルトハウス管弦楽団、シュトゥットガルト放送交響楽団、ケルン・ギュルツェニヒ管弦楽団、ネーデルラント・フィルハーモニー管弦楽団など、世界の一流オーケストラと共演。ケルン歌劇場では、新演出によるプロコフィエフの不朽の名作「戦争と平和」を指揮し大好評を博した。来シーズン以降は、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団、ケルンWDR交響楽団、バンベルク交響楽団、読売日本交響楽団、モンテカルロ・フィルハーモニー管弦楽団、フィルハーモニア台湾（国家交響楽団）、ロンドンのフィルハーモニア管弦楽団との共演が予定されている。

ザンデルリンクは、2010年、フランクフルト・アム・マインで「スカイライン・シンフォニー」というプロジェクトを立ち上げた。これは、ヨーロッパの主要なオーケストラで活躍する演奏家たちが、ゲーテ大学のキャンパスに集結し、非常に親しみやすくカジュアルな形式で演奏を行うという、若い聴衆を対象にした特別なコンサート・プロジェクトである。

彼は、チェリストとしていくつかのコンクールで好成績を収めた後、クルト・マズアに認められライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団の首席チェリストに就任し、その音楽キャリアをスタートさせた。さらには、ベルリン放送交響楽団でも首席チェリストを務め、また、チェロのソリストとしては、バイエルン放送交響楽団、パリ管弦楽団、ボストン交響楽団といった、ヨーロッパやアメリカの有名オーケストラに客演している。



©Marco Borggreve

Michael Sanderling, *Principal Conductor*

Michael Sanderling was born and educated in Berlin and after a successful career as a cellist turned to conducting. His debut as a conductor with the Dresden Philharmonic in 2005 was followed by a period of intensive artistic cooperation which led to his appointment as Principal Conductor starting with the 2011 / 2012 season. As the Artistic Director and Principal Conductor of the Kammerakademie Potsdam from 2006 to 2010, he appeared at international concert venues and recorded several CDs, including Shostakovich's chamber symphonies for SONY Classical. Michael Sanderling has worked with many leading international orchestras including the Tonhalle-Orchester Zürich, Sinfonieorchester des BR, the Münchner Philharmoniker, the Sächsische Staatskapelle Dresden, the Konzerthausorchester Berlin, the RSO Stuttgart, the Gürzenich Orchester Köln and the Nederlands Philharmonisch Orkest. At the Cologne Opera he led the highly praised new production of Sergei Prokofiev's monumental work *War and Peace*. In forthcoming seasons he will give his debut performances with the

Gewandhausorchester Leipzig, the WDR Sinfonieorchester Köln, the Bamberger Symphoniker, the Yomiuri Nippon Symphony Orchestra, the Orchestre Philharmonique de Monte-Carlo, the National Philharmonic Orchestra Taiwan and the Philharmonia Orchestra London.

In 2010, he founded *Skyline Symphony* in Frankfurt / Main – a collaboration of Europe's leading orchestra players who perform special concert projects on the campus of the Goethe University, geared to younger audiences in a highly approachable setting. At the beginning of his career Kurt Masur engaged him as principal cellist with the Gewandhausorchester Leipzig – after he successfully took part in several competitions. He served in the same position with the Rundfunk-Sinfonieorchester Berlin. He appeared as a soloist with renowned orchestras in Europe and the USA, including the Sinfonieorchester des BR, the Orchestre de Paris and the Boston Symphony Orchestra.



©Nanos Borggreve

ドレスデン・フィルハーモニー管弦楽団 Dresdner Philharmonie

首席指揮者: ミヒャエル・ザンデルリンク
Principal Conductor: Michael Sanderling
名誉指揮者: クルト・マズア
Honorary Conductor: Kurt Masur
首席客演指揮者: マルクス・ポシュナー
First Guest Conductor: Markus Poschner

1870年に創設されたドレスデン・フィルハーモニー管弦楽団は、「ゲヴェルベハウス・ザール(産業会館ホール)」で演奏会を行うことによって、ドレスデンの一般市民の音楽文化に新風を吹き込んだ。ドレスデン・フィルは、今日もお、こうした伝統を忠実に守っている。つまり、ドレスデン・フィルは、ドレスデン市のオーケストラとして、幅広い層の聴衆に対する義務を負っているという自覚を持って活動しているのである。同楽団は、古典派からロマン派までの中心的なレパートリーに加えて、現代作品にも常に門戸を開き、演目に取り上げている。この傾向は今日も続いており、最近ではソフィア・グバイドゥーリナ、ロディオ・シチュエリン、ギヤ・カンチェリ、マイケル・ナイマンらに委嘱した作品を演奏している。

ドレスデン・フィルは、創立以来、それぞれの時代の名だたる指揮者たちと活動してきた。1930年代に世界的な名声を得たのは、ハウル・ファン・ケンペンのリーダーシップによるところが大きい。また、第二次世界大戦後のオーケストラ再建期においては、ハインツ・ボンガルツが首席指揮者として多大な貢献を果たし、1967~72年に首席指揮者を務めたクルト・マズアも特筆すべき成果を挙げた。

1994/95年シーズンは、世界的に定評のあるミシェル・ブラッソンが首席指揮者を務め、コンサートのプログラムでもフランスの重要な作曲家に焦点が当てられるようになった。1999年にブラッソンが退任すると、2001年に彼に劣らない名声を得ているマレク・ヤノフスキがその後継者となる。ドイツの伝統を継承し、あらゆる世界一流の演奏会場で世界的なオーケストラと共演してきた経験豊富なヤノフスキの参加は、ドレスデン・フィルにとって歓迎すべき転機となった。

2003/04年シーズンにはラファエル・ブリューベック・デ・ブルゴスが首席客演指揮者に迎えられ、1年後に首席指揮者に就任する。世界のトップ・オーケストラを指揮してきた経験とカリスマ性をもつ彼と、ドレスデン・フィルとのパートナーシップは大成功を取め、ドレスデンツアーでのコンサート、世界各国で発売されたCDの高い評価につながった。



©Marco Boggione

ドレスデン・フィルには、注目すべき指揮者やソリストたちが定期的に客演している。ヨハネス・ブラームス、ピョートル・チャイコフスキー、アントニン・ドヴォルザーク、リヒャルト・シュトラウスは、自作の曲を指揮するために同オーケストラに客演した。さらには、ヘルマン・アーベントロート、エドゥアルト・ファン・ベイスム、フリッツ・ブッシュ、オイゲン・ヨッフム、ヨーゼフ・カイルベルト、エーリッヒ・クライバー、ハンス・クナッパーツブッシュ、フランツ・コンヴィチニ、アルトゥール・ニキシュといった大家たちが客演した。

近年では、マルク・アルブレヒト、デニス・ラッセル・デイヴィス、ミゲル・ハース=ベドヤ、クリスチャン・ヤルヴィ、ミハイル・ユロフスキ、ドミトリー・キタエンコ、ヤコフ・クライツベルク、サー・ネヴィル・マリナー、ウェイン・マーシャル、クルト・マズア、インゴ・メッツマッハー、アンドリス・ネルソンス、マルクス・ポシュナー、アンドレ・プレヴィン、カール=ハインツ・シュテフェンス、ユーリ・テミルカーノフ、ヤン・バスカル・トルトゥリエ、セバスティアン・ヴァイグレ、シモーネ・ヤング、ローター・ツァグロセクといった指揮者たちが客演している。

またソリストでは、ルドルフ・ブッフビンダー、ユリア・フィッシャー、キリル・ゲルシュタイン、マティアス・ゲルネ、ヴァディム・グルズマン、マルティン・グルビンガー、ホーカン・ヘルデンベルグ、ミカエラ・カウネ、アンネ=ゾフィー・ムター、ダニエル・ミュラー=ショット、ファジル・サイ、ジャン=イヴ・ティボーデらが定期的に客演し、同オーケストラのレパートリーをより豊かなものとしている。

1909年にはアメリカツアーを行ったドイツ最初のオーケストラのひとつとなり、以来、ドレスデン・フィルは、ヨーロッパ、南北アメリカ、アジアの主な音楽拠点へのツアーを重ねている。

ミヒャエル・ザンデルリンクは2011/12年シーズンから首席指揮者を務めており、今シーズンは、中国、香港、マカオ、韓国、デンマーク、スペイン、及びケルン、ミュンヘン、ウィーンをはじめとする中央ヨーロッパの主要音楽都市へのツアーでドレスデン・フィルを指揮する。

THE DRESDEN PHILHARMONIC

Principal Conductor : Michael Sanderling

Honorary Conductor : Kurt Masur

First Guest Conductor : Markus Poschner



Upon being founded in 1870, the Dresden Philharmonic brought a new spirit to the city's public music culture with its performances at the ›Gewerbehauseaal‹. The orchestra remains true to this tradition today. As the city's orchestra, the Dresden Philharmonic is conscious of its obligation to a diverse audience. In addition to its classical-romantic core repertoire, the Dresden Philharmonic has always been open to performing contemporary compositions. The orchestra continues this trend today with recently commissioned works from Sofia Gubaidulina, Rodion Schtschedrin, Gija Kancheli, and Michael Nyman.

In 2010 the Dresden Philharmonic marked the 140th anniversary of its founding. The Dresden Philharmonic has worked with the most eminent conductors in each historical period since its founding. The orchestra gained worldwide fame in the 1930s, with much credit going to the leadership of Paul van Kempen. This in turn attracted the great conductors of the time to appear in concert with Philharmonic, including Arthur Nikisch, Hermann Abendroth, Hans Knappertsbusch, Fritz Busch, Erich Kleiber and Joseph Keilberth. The work of Heinz Bongartz as Principal Conductor was essential in rebuilding the orchestra in the years following World War II. Among other conductors, Kurt Masur served as Principal Conductor of the Dresden Philharmonic. From the 1994/95 concert season the internationally acclaimed Principal Conductor Michel Plasson led the Philharmonic, a collaboration which resulted in a strong focus on key French composers on the orchestra's concerts programs. In 1999 Michel Plasson's tenure came to an end. In 2001 an equally renowned conductor, Marek Janowski, became Plasson's successor. Deeply rooted in German tradition and familiar with the performance practice of leading orchestras in all the world's major music centers, his coming to the Philharmonic was a particularly welcome turn of events. For the 2003/04 season Rafael Frühbeck de Burgos was named Principal Guest Conductor and a year later



©Marco Borggreve

became Principal Conductor. His experience conducting the best orchestras in the world and his personal charisma led to a highly successful partnership with the orchestra, both concerts performed in Dresden, on tour and in the international music recording industry. Since beginning of the season 2011/12 Michael Sanderling is Principal Conductor.

Noteworthy conductors and soloists regularly gave guest performances with the Dresden Philharmonic: Johannes Brahms, Peter Tchaikovsky, Antonín Dvořák and Richard Strauss came to conduct their own works. In later years this included artists like Hermann Abendroth, Eduard van Beinum, Fritz Busch, Eugen Jochum, Joseph Keilberth, Erich Kleiber, Hans Knappertsbusch, Franz Konwitschny or Arthur Nikisch. In recent times the orchestra has worked with guest conductors such as Marc Albrecht, Dennis Russell Davies, Miguel Harth-Bedoya, Kristjan Järvi, Michail Jurowski, Dimitri Kitajenko, Yakov Kreizberg (†), Sir Neville Marriner, Wayne Marshall, Kurt Masur, Ingo Metzmacher, Andris Nelsons, Markus Poschner, André Previn, Karl-Heinz Steffens, Yuri Temirkanov, Yan Pascal Tortelier, Sebastian Weigle, Simone Young and Lothar Zagrosek. Regular guest appearances by soloists such as Rudolf Buchbinder, Julia Fischer, Kirill Gerstein, Matthias Goerne, Vadim Gluzman, Martin Grubinger, Håkan Hardenberger, Michaela Kaune, Anne-Sophie Mutter, Daniel Müller-Schott, Fazil Say, and Jean-Yves Thibaudet have also enriched the orchestra's repertoire. In 1909 the Dresden Philharmonic became one of the first German orchestras to perform a concert tour in the United States. Since then concert tours have taken the Dresden Philharmonic to the major music centers of Europe, the Americas and Asia. Michael Sanderling, Principal Conductor since 2011/12, will lead the Dresden Philharmonic this season on tours to China, Hong Kong, Macau, Korea, Denmark, Spain and to the leading Central European music centers including Cologne, Munich and Vienna.

上原 彩子 (ピアノ)
Ayako Uehara, Piano



©EMI CLASSICS

3歳児のコースからヤマハ音楽教室に、1990年よりヤマハマスタークラスに在籍。ヴェラ・ゴルノスタエヴァ、江口文子、浦壁信二に師事。第3回エトリンゲン国際青少年ピアノコンクールA部門第1位を始め多くのコンクールで入賞を果たす。2000年3月、第5回浜松国際ピアノアカデミーに参加、ピアノアカデミーコンクールでは、アカデミー史上、初のグランプリを受賞。同年7月、シドニー国際ピアノコンクールにて第2位及びピープルズ・チョイス賞、オーストラリア人作品賞、室内楽賞、ショパン賞、シューベルト賞、ドビュッシー賞、エチュード賞を受賞。また同年11月、第4回浜松国際ピアノコンクールにて第2位、及び日本人作品最優秀演奏賞を受賞。2002年6月には、第12回チャイコフスキー国際コンクール・ピアノ部門において、女性としてまた、日本人として史上初めての第1位を獲得した。第18回新日鉄音楽賞フレッシュアーティスト賞受賞。

これまでに日本国内はもとより世界各地での音楽祭、リサイタルやテレビ出演の他、ロストロポーヴィチ、マゼール、小林研一郎、飯森範親、大友直人各氏の指揮のもと、国内外のオーケストラのソリストとしての共演も多い。また、2004年にはロンドンのウイグモアホールにて行ったリサイタルデビューが絶賛され、翌年6月に再びウイグモアホールにてリサイタルを行っている。2004年12月にはデュトワ指揮/NHK交響楽団と共演し、2004年度ベスト・ソリストに選ばれた。

CDは日本人ピアニストとして初めて、EMIクラシックスと契約し、チャイコフスキーの作品を収めた「グランド・ソナタ」、フリーベック・デ・ブルゴス指揮/ロンドン交響楽団との共演によるチャイコフスキーの協奏曲第1番及びプロコフィエフのソナタ第7番等を収めた「プロコフィエフ作品集」が、ワールドワイドで発売されている。

2006年1月10日には「日本におけるロシア文化フェスティバル2006」オープニング・ガラコンサートでゲルギエフ指揮/マリンスキー歌劇場管弦楽団、2007年1月にはベルリン・フィル八重奏団と共演。また、2008年9-10月にはクリスチャン・ヤルヴィ指揮/ウィーン・トーンキュンストラ管弦楽団とのオーストリア及び日本ツアーを行って好評を博し、2010年5月にはユーリ・バシュメット率いる国立ノーヴァヤ・ロシア交響楽団、2013年1月にはウカシュ・ボロヴィチ指揮/プラハ交響楽団と日本ツアーを行い、高い評価を受けた。

川久保 賜紀 (ヴァイオリン)
Tamaki Kawakubo, *Violin*



©Yuji Hori

2002年チャイコフスキー国際コンクール最高位入賞(1位なしの2位)。同時に、ロシア作曲家協会による「現代音楽の優れた演奏に対する特別賞」受賞。2001年サラサーテ国際ヴァイオリン・コンクール優勝。2004年出光音楽賞を受賞。2007年S&R財団ワシントン・アワード賞受賞。

5歳の時にヴァイオリンを始める。R.リプセット、D.ディレイ、川崎雅夫、Z.ブロン各氏に師事。ロサンゼルス・フィル、デトロイト響、ヒューストン響、シンシナティ響、ボルティモア響、サンフランシスコ響、クリーヴランド管など主要な北米オーケストラと共演し、幼少時より豊富なステージ経験を積む。ラヴィニア音楽祭では、芸術監督エッセンバッハと共演し、「エッセンバッハの躍動感あるピアノに彼女は常に音楽的に音をぴったりと合わせ、すばらしい落ち着きと自信を持って演奏した/シカゴ・トリビューン紙」と評された。さらに、ルイジ指揮/ライブツヒ放送響及びサンクトペテルブルグ響のほか、リトアニア、ドイツ、スウェーデン、イタリアなど、ヨーロッパに活躍の場を広げる。

日本へは、1997年チョン・ミョンファン指揮/アジア・フィルのソリストとして初来日。同年ニューヨークのモーストリー・モーツァルト・フェスティバル・オーケストラとのツアーで再来日し、その年の演奏活動に対して、リンカーンセンターより、エヴリー・フィッシャー賞を受賞。以後、定期的に来日して、日本の主要オーケストラと共演を重ねる他、インバル指揮/ベルリン響、K.ヤルヴィ指揮/ウィーン・トーン・キュンストラ管、フェドセーエフ指揮/モスクワ放送響、プレトニョフ指揮/ロシア・ナショナル管などの日本公演のソリストに迎えられ、高度な技術と作品の品位を尊ぶ深い音楽性に高い評価を得ている。また2010年にはドイツ国内10都市において、「ヴィヴァルディ:四季」コンサートツアーを行った。

CDは、エイベックス・クラシックスより2004年協奏曲によるデビュー・アルバムをリリース。セカンドアルバム「リサイタル!」は『レコード芸術』の特選盤に選ばれ、2009年リリースの「ヴィヴァルディ:四季」は、SUZUKI「ジムニー」のテレビCMに使われて話題となる。室内楽にも積極的に取り組み、遠藤真理、三浦友理枝とのトリオ「RAVEL」をリリース。最新CDは「ライヴ・イン・ワシントン」。

使用楽器は、1779年製ジョヴァンニ・パティスタ・グァダニーニ(S&R財団貸与)。ベルリン在住。
オフィシャル・ウェブ・サイト <http://www.tamaki-kawakubo.com/>



Program Notes

寺西 基之 (音楽評論家) Motoyuki Teranishi

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン (1770-1827)

「エグmont」序曲 Op.84

ベートーヴェンは1809年から翌年にかけて、ゲーテの劇「エグmont」のウィーン上演のために付随音楽を作曲した。フランドルの領主エグmont伯を題材とした物語で、祖国をスペインの圧政から救うべく独立運動を指導した彼は結局捕えられて死刑を宣告され、一方エグmontを救おうとした恋人クレールヒェンも自殺に追い込まれるが、彼女は処刑目のエグmontの前に幻影として現われ彼を祝福する。ベートーヴェンは序曲と付随音楽9曲を作曲したが、中でも劇全体の悲劇性を表現した序曲は単独でよく演奏される傑作で、暗く重苦しい序奏(ソステヌート・マ・ノン・トロppo)の後、悲壮感と闘争性に満ちたソナタ形式の主部(アレグロ)が発展、最後は処刑された英雄エグmontと死によって彼の魂を救済したクレールヒェンを讃える力強いコーダで閉じられる。

ピアノ協奏曲第5番 変ホ長調 Op.73「皇帝」

1809年に書かれたこの作品は、他人の付けた「皇帝」の愛称のとおり、スケールの大きさ、雄渾な性格の諸主題、綿密な展開法、名技的なピアノ独奏とそれに有機的に絡む雄弁な管弦楽などの円熟した書法が堂々たる作風のうちに総合された傑作で、中期の一連の大作群をとおしてベートーヴェンが獲得したダイナミックで劇的なスタイルが協奏曲様式と見事に結び付いたものとなっている。従来の慣習である演奏家による任意の即興カデンツァはこの曲では廃止され、その代わり第1楽章冒頭のピアノスティックな独奏など、カデンツァが記譜された形で曲の中に組み込まれている点も注目される。

第1楽章(アレグロ)は協奏風ソナタ形式だが、前述のように冒頭で管弦楽の和音に続いてピアノが華麗なカデンツァを演奏するのが特徴的。独奏と管弦楽が互いに拮抗しつつ発展するシンフォニックで壮麗な楽章だ。**第2楽章**(アダージョ・ウン・ポーコ・モツォ)は弱音器付きの弦が提示する瞑想的な主題を変奏しながら進む緩徐楽章。切れ目なく**第3楽章**(ロンド、アレグロ)へ続き、力感に満ちた華麗な発展を示していく。

交響曲第5番 八短調 Op.67「運命」

「運命」の通称で有名な傑作。ベートーヴェンは中期に18世紀の古典様式を超える大規模なスタイルと大胆な書法による作風を打ち出したが、1808年完成のこの交響曲はその中期の代表作で、タタターの運命動機を中心とする闘争的性格と全体の暗→明の流れ

れによって、苦悩の克服という理想主義的理念が表現されている。そうした理念の表現のためにこの作品には、例えば第1楽章での徹底した運命動機による構築法、運命動機を全曲に循環的に用いて全体の暗から明への流れを明確にする構成法、第3楽章と第4楽章をクレッシェンドで連続させて明への移行を際立たせる手法、第4楽章で勝利感を強調するために当時交響曲では前例がほとんどなかったトロンボーン、ピッコロ、コントラファゴットを用いていることなど、様々な革新的書法が工夫されている。

第1楽章 (アレグロ・コン・プリオ) は運命動機で構築された緊迫感に満ちたソナタ形式。**第2楽章** (アンダンテ・コン・モート) は優美な主題を持つ緩徐楽章で、変奏原理で自由に発展する。**第3楽章** (アレグロ) は運命動機を織り込んだスケルツォと明朗なトリオからなる。劇的な移行部分を経て勝利の**第4楽章** (アレグロ) に突入、再現部直前に苦悩を回想するかのように運命動機が示されるものの、全体は輝かしい高揚を示していく。

交響曲第6番 へ長調 Op.68「田園」

前項の交響曲第5番と同じ1808年の完成だが、劇的緊張に満ちた第5番とは対照的に、穏やかなのびやかさを持つ作品である。そうした作風は作曲者自身「田園」と題したこの曲の標題的性格に由来するもので、彼は「絵画的描写よりむしろ感情の表現」と断りながらも、各楽章に標題を付け、随所に描写表現も取り入れるなど、この曲で標題交響曲のあり方を打ち出した。それは以後のロマン派の交響曲に大きな影響を及ぼすことにもなる革新的な試みだった。そのような標題的性格と関連して、この曲は書法上も独自の特質を示している。嵐を描写する自由な形式の第4楽章を挟んだ5楽章構成とし、しかも第3楽章から第5楽章までを連続させるという、当時の交響曲の常識を外れた形をとっている点もその一例。伝統的な交響曲の論理を標題音楽の特性に融合させようとする姿勢がそこに窺える。

第1楽章「田舎に着いた時に目覚める喜ばしい快活な気分」(アレグロ・マ・ノン・トロppo) はのびやかな楽想によるソナタ形式。**第2楽章**「小川のほとりの情景」(アンダンテ・モルト・モート) は穏やかな緩徐楽章で、結尾で鳥の囀りが描写される。**第3楽章**「田舎の人々の楽しい集い」(アレグロ) は3拍子の民俗舞曲と2拍子の粗野な舞曲が対置される。**第4楽章**「雷鳴、嵐」(アレグロ) は大自然の脅威が迫真的に描かれる。**第5楽章**「牧人の歌。嵐の後の神への感謝に結び付いた慈愛の気持ち」(アレグレット) は牧歌的な主題を持つロンド・ソナタ形式のフィナーレ(なお楽章の題は作曲者のオリジナルの題を採用した最新のベーレンライター社版によった)。



交響曲第7番 イ長調 Op.92

交響曲第6番「田園」の後、4年ほど交響曲の作曲から離れていたベートーヴェンは、1811年終りから翌12年にかけて交響曲第7番を生み出した。この第7番の特徴はリズムに特別の重きを置いていることで、リズム・パターンの反復を曲の構成原理とし、リズムの持つ根源的な生命力を打ち出した作品となっている。ワーグナーがこの交響曲を“舞踏の神格化”と評したのも、そうした反復リズムの持つ根源的な生命感に基づいたこの作品の性格をうまく言い当てている。その一方でこの交響曲にはこの時期のベートーヴェンの特色であるカンタービレ志向もはっきりと現れており、諸主題は歌謡的な性格の際立つものとなっている。第7交響曲の特質は、このようにリズム的統一法とカンタービレ豊かな主題とが結び付いた点にあるといえよう。

第1楽章（ポーコ・ソステヌート～ヴィヴァーチェ）は充実した序奏の後、付点リズムの支配する躍動感に満ちたソナタ形式の主部が続く。**第2楽章**（アレグレット）は行進曲風のタータタ・ターターというリズム・パターンに支配される。**第3楽章**（プレスト）では跳びはねるような主題を持つスケルツォ。**第4楽章**（アレグロ・コン・ブリオ）は激しい力感に満ちたリズムのエネルギーで推進していく輝かしいフィナーレである。

フェリックス・メンデルスゾーン (1809-47)

ヴァイオリン協奏曲 ホ短調 Op.64

古今のヴァイオリン協奏曲の中でもとりわけ親しまれているこの作品は、ライプツィヒのゲヴァントハウス管弦楽団の指揮者として活躍していたメンデルスゾーンが、同団のコンサートマスターだった名手ダーフイットのために作曲したものである。構想は1838年になされたが、実際の創作は遅れ、1844年に完成をみた。ダーフイットの助言も多々得られたために、確かな構成と豊かなロマン性の融合する円熟した作風を示す名作となっており、全体は古典的な均斉感を示しつつも、全楽章を連続させるなど随所に新しい工夫が見られる。

第1楽章（アレグロ・モルト・アパッシオナート）にしても通常の協奏曲形式をとらずに冒頭すぐに独奏が主題を提示したり、カデンツァを展開部の終りに置いたりなど、独自の形式が試みられている。**第2楽章**（アンダンテ）は叙情美溢れる緩徐楽章だが、中間部では不安な情感を高める。**第3楽章**（アレグレット・ノン・トロppo～アレグロ・モルト・ヴィヴァーチェ）は序奏付きソナタ形式によって快活に運ばれる名技的なフィナーレである。

ヨハネス・ブラームス (1833-97)

交響曲第1番 八短調 Op.68

ブラームスのこの作品は、構想から完成までに20年以上の歳月が費やされた。その大きな理由としては、自己批判的な性格を持ち、先人ベートーヴェンを強く意識していた彼が、交響曲という伝統ジャンルを手掛けることに慎重であったことが考えられる。また古典的伝統とロマン的な感情表現の両方を重んじた彼にとって、ロマン的な表現を伝統的な交響曲の論理といかにして結び付けるかということも大きな課題であったに違いない。最初の構想がなされたのは1855年前後、その後多くの試行錯誤を繰り返し、やっと1874年になって自信を持って完成をめざしての本腰を入れるようになる。その2年後に全曲はやっと実を結び、1876年11月に初演されたが、さらにその後第2楽章が大幅に改作され現行の形に仕上げられた。ベートーヴェンを想起させる暗→明の構図、全体の確かな古典的な論理性、その中に湛えられた豊かなロマン的な情緒など、ブラームスが長年模索してきた自らの交響曲のスタイルが見事に結実した傑作となっている。

第1楽章 (ウン・ポーコ・ソステヌート～アレグロ) は序奏付きのソナタ形式で、暗く闘争的に展開する。**第2楽章** (アンダンテ・ソステヌート) は叙情に満ちた3部形式の緩徐楽章。**第3楽章** (ウン・ポーコ・アレグレット・エ・グラツィオーソ) は間奏風の楽章。**第4楽章** (アダージョ～ピウ・アンダンテ～アレグロ・ノン・トロppo・マ・コン・プリオ) は、不安な緊迫感の漂う序奏に始まるが、やがて霧を晴らすかのようなホルンの旋律と荘重なコラールが奏された後、明朗な第1主題が示されて主部に入る。晴れやかに発展するダイナミックなフィナーレである。



©Marco Borggreve

寺西 基之 (てらにし・もとゆき)

1956年生まれ。上智大学文学部卒、成城大学大学院修士課程(西洋音楽史専攻)修了。音楽評論家として執筆活動を行う一方、(公財)東京交響楽団監事、(公財)東京二期会理事、新日鉄住金音楽賞選考委員、(公財)アフィニス文化財団理事などを務める。共訳書にグラウト/パリスカ『新西洋音楽史』、共著に『ピアノの世界』ほか。



指揮者、インテンダント、 楽団員が語る ドレスデン・フィルのいま

中村 真人 (ジャーナリスト・ベルリン在住)
Masato Nakamura

DRESDNER
PHILHARMONIE

©Marco Borggreve

3月末の週末、筆者はまだ冬の気配が残るドレスデンを訪ねた。2011/12年シーズンより首席指揮者を務めるミハエル・ザンデルリンク指揮のドレスデン・フィルハーモニー管弦楽団が、昼夜2回に分け1日でベートーヴェンのピアノ協奏曲全曲を演奏する意欲的な公演を行ったからである。

マチネーの終演後、ちょうどピアノ協奏曲第1番から第3番までを指揮した直後のマエストロに、この作品群の魅力から聞いてみた。

「この5曲を演奏することは、作曲家ベートーヴェンの進化の過程を知る上で、素晴らしい可能性を秘めています。ピアニストが名人芸を誇示する古典派の時代から、やがてピアノとオーケストラが『音による言語』といえますか、精神的なメッセージを発するようになり、特に第4番や第5番の協奏曲ではピアノ独奏付きの交響曲とも言うべき高みに達しています。ゆえにまとめて演奏することは、とても刺激的。5人の若手ソリストを起用することで、ベートーヴェン自身の成長やピアノの技法的な進化だけでなく、それぞれの曲が持つ性格の違いを提示したかったのです」

モダン・オケを率いながら、小型ティンパニの小気味よい響きや伝統的な両翼配置を採用した弦楽器の響きが印象に残った。その意図について聞いてみると…

「ベートーヴェンを演奏するとき、私は常にこの並べ方を採っています。当時はこの配置が一般的であり、ベートーヴェンはそれを念頭に曲を書いたからですが、もう一つの理由は、これらの作品がメロディーだけでなく内声部が立ち上がってくるような音楽になっているからです。第2ヴァイオリンが第1ヴァイオリンの背後で演奏すると、内声の響きが損なわれてしまいます。ステレオのように左右に並べることで、メロディー

とバスが近い距離になるという利点も生まれ、内声部との間で立体的な効果が作られるのです」

来日公演のメインの演目の一つ、上原彩子がソロを務める第5番《皇帝》についても期待が膨む。

「《皇帝》は当時も今もあらゆるピアノ協奏曲の最高峰であり、まさに交響曲的な協奏曲。ピアノパートは、ヴィルトゥオーゾ的という枠組みを完全に越えています。変ホ長調という調性は、当時三位一体につながると考えられており、雄渾さや偉大さの表現に好んで使われていました。これがこの作品の基本的な性格だと考えています」

こう語るミヒャエル・ザンデルリンクは、言うまでもなく、かの大指揮者クルト・ザンデルリンクの息子である。2人の兄も指揮者という音楽一家として育ったが、ミヒャエル自身はチェリストとして音楽家のキャリアをスタートした。なぜ指揮者に転身しようと考えたのだろうか。こんなエピソードを披露してくれた。

「父や2人の兄が指揮者だったことで、幼年時代に何がしかの影響を受けたのは確かです。12歳のとき、指揮者ではなく演奏家になろうと固く決意しましたが、その後指揮者なしの室内オーケストラでしばしば稽古する役を任されました。ところが、実際にやってみたら、ポツケリーニやハイドン、モーツァルトといったレパートリーではチェロの役は少なく、しかもチェロがアウトタクトを取ることが多いため、出だしの合図を出すことが難しい。あるとき私は、『稽古はつけられるけれど、本番で弾き振りはできないよ』と言って、そこで押し問答になりました。自分としてはチェリストのキャリアを汚したくなかったので、本番では楽器を捨てて、指揮台に立ったんです。これがそもそもの始まりです(笑)」

指揮者としての活動を始めた後も、2006年まではベルリン放送交響楽団の首席チェロ奏者として、多くの指揮者の仕事ぶりを間近で吸収してきた。特に音楽監督のマレク・ヤノフスキについて、「オーケストラがどのように機能しているかが本当によくわかっており、その厳密で目的の明確なリハーサル方法からは特に多くを学びました」と語る。とはいえ、穏やかな表情で語るザンデルリンク氏は、いまだどこか「青年」の面影を残しており、このエピソードに伺われるように、仲間との音楽活動でリーダーシップを請われているうちに、「いつの間にか」指揮者になっていた。そんな印象を与える人である。来シーズンはミュンヘン・フィルやケルン放送響に客演するなど、いよいよ活躍の場が広がりつつあるが、これからのしなやかに、名指揮者への道を歩んでいくのではないだろうか。

「ドレスデン・フィルにとってドイツの交響曲レパートリーはとりわけ重要なので、このプログラムで日本に行けるのはうれしい。今われわれがこれらの作品をどのように感じているか、そしてその感覚がどのような伝統から生まれてきたものなのかをご披露した

いですね」と今回日本での指揮者デビューとなるザンデルリンク氏は、最後にこう抱負を寄せてくれた。

この日のインタビューには、インテンダントのアンゼルク・ローゼ氏と首席オーボエ奏者のウンディーネ・レーナー＝シュトレ女史も同席してくれた。2005年にインテンダントに就任したローゼ氏との会話で大きな話題になったのは、「ホール」のことだった。

「創設140年以上の伝統を持つこのオーケストラの特別な響きを育てること、レパートリーの拡大、楽団員の労働環境を向上させるといったこと以外に、自分の大事な任務と考えていたのが、東独時代に建てられた響きの悪い本拠地のホール『文化宮殿』を何とかすることでした。模範となったのは、札幌のキタラ、東京のサントリーホール、大阪のザ・シンフォニーホールなど、日本の素晴らしいホール。時間はかかりましたが、最終的に政治レベルでの決断が下され、ドレスデン市は新ホールの建設を決定したのです」

この4月、現在の文化宮殿の外観はそのままに、内装を完全に造り変えるというユニークなやり方で、建設が始まった。

「内観はワインヤード形式で、ベルリン・フィルハーモニーとサントリーホールの折衷と言えるでしょう。サントリーホールのような響きのいいホールが完成したらいいのですが」と語るローゼ氏。ドレスデン・フィルにとってはもちろん、ドレスデン市にとっても、待望の現代的なコンサートホールの誕生ということになる。



インテンダントのアンゼルク・ローゼ氏

新ホールの建設工事のため、今回の公演は中規模の会場（シャウシュピールハウス）で行われたのだが、それでも伝わってきたのは、このオーケストラのほの暗くやわらかい独自の響きの魅力だった。2005年から首席オーボエを務めるレーナー＝シュトレ女史が、その魅力を生き生きと語ってくれた。

「弦楽器も管楽器も広がりがあって丸く、温かい響きを持っています。雲のような、ふわふわの心地よいベッド上で演奏しているような感じでしょうか（笑）。一方で演奏するのが難しい面もあります。私が以前在籍していたライプツィヒのMDR交響楽団では、音の出だしがある一点でぴったり入るのですが、ドレスデン・フィルでは呼吸をしてから、時々微妙なタメが生まれる。それでもお互いが聴き合って一緒に入り、響きが発展していくのです」

この言葉にローゼ氏が反応する。

「ドレスデン・フィルは世界中のいろいろな場所で演奏してきましたが、いつも求めら

れるのはドイツやロシアのレパートリー。それはわれわれが他では得がたいドレスデン固有の響きを持っているからでしょう。私の一番の思い出は、2008年に日本で行ったブラームス・チクルス。ある知人が、『暗く、柔らかい、本当にいい響きですね』と評してくれたのですが、我が意を得たりという思いでした。それは、甘さは控え目だけれども、柔らかくまろやかな味わいのドイツのチョコレートに例えられるかもしれません(笑)』

今回の日本ツアーは当初2011年に予定されていたが、大震災の影響で中止となった。それだけに、メンバーとしても期する思いがあるようだ。

「今回5年ぶりに日本に行けるのを心から楽しみにしています。海外ツアーはわれわれにとって日常から離れた特別なものですが、今回は予定から2年遅れてしまったことで、さらに気持ちは高まっています。毎回古きよき欧州からの挨拶状を持って来ているつもりが、皆さん作品の隅々までよく知っているのに驚かされますし、舞台に立った時から期待感を肌で感じます。ホールの客席の端まで最高の演奏で応えたいですね」(レーナー=シュトレ氏)


一見極めてオーソドックスなプログラムだが、古きよき欧州の楽団にしかない響きがそこかしこから聴こえてくるはずだ。それを彩るフレッシュなマエストロ、そして日本の優秀な若手ソリストとの共演をどうぞお楽しみいただきたい。



©Marco Borggreve

中村 真人 (なかむら・まさと)

1975年神奈川県横須賀市生まれ。早稲田大学第一文学部ドイツ文学専修卒業後、2000年よりベルリン在住。映像制作会社勤務などを経て、現在はフリージャーナリスト。音楽、歴史、都市論など多彩な視点からベルリンやドイツの今をレポートしている。著書に「素顔のベルリン」(ダイヤモンド・ビッグ社)など。



チャイコフスキー 国際コンクールから11年、 川久保賜紀と上原彩子が ドイツ作品の王道で これまでの成果を世に問う

伊熊 よし子 (音楽評論家) Yoshiko Ikuma

2002年の第12回チャイコフスキー国際コンクールにおいて、川久保賜紀がヴァイオリン部門最高位、上原彩子がピアノ部門優勝の栄冠に輝いてから、はや11年目を迎える。この間、ふたりはそれぞれレパートリーをじっくりと広げ、内外のさまざまな音楽家と共演し、さらにテクニックと表現力に磨きをかけ、自己の道を邁進し続けている。

川久保賜紀は、アメリカ生まれのアメリカ育ち。日本語よりも英語のほうが堪能という国際派である。だが、素顔の彼女は昔の日本女性が持っていた気品とおだやかさを感じさせ、謙譲の美德を備え、つつまじやかな雰囲気なたたえている。人をふんわりと包み込むような温かい笑顔も印象的だ。

「私、メンタルは完全に日本人ですね。白黒はっきりさせるタイプではなく、即断も苦手です。レストランなどでも、メニューを見てすぐに食べたい物を決めることができない(笑)。ステージでも結構緊張してしまう」

彼女はスリムな美しい容姿の持ち主。シンプルなドレスに身を包み、楚々とした感じでステージに現れる。演奏もしっとりとした詩的で清涼な音色が特徴。ヴァイオリンは超絶技巧を前面に押し出す演奏が可能だが、川久保賜紀は表現力に重きを置き、作品に込められた作曲家の魂を代弁するように、聴き手の心にゆっくりと染み込む音楽を奏でる。

そのやすらぎに満ちた、静かに語りかける音楽にチャイコフスキー国際コンクールの審査員たちも魅せられ、最高位を授けた。

「コンクールのときのエネルギーの素は、カフェのチーズケーキでした。お肉もたくさん食べましたよ。これで長期間におよぶ演奏の緊張から解き放たれ、体力が備わり、なんとか本来の自分を取り戻すことができました」

当時は、今後の課題と夢をこう表現した。

「いろんな音が出せるヴァイオリニストになりたいんです。子どものころから個性的で表現力に富んだ、味わい深い音楽を作り出すヴァイオリニストになるのが夢でした。そのためには室内楽にも取り組みたい」

その後ヨーロッパに移り、さらなる研鑽を積み、9年前からベルリンに居を定めてさまざまな音楽家と組んで室内楽でも活躍。ピアノ・クアルテットにも参加している。

そんな川久保賜紀が演奏するのはヴァイオリニストの必須作品とい

©Yuji Hori

われるメンデルスゾーンのヴァイオリン協奏曲。10代のころから演奏している作品で、デビューCDでも取り上げている。その演奏は馥郁たるリズムを感じさせるもので、音色の繊細さ、息の長い旋律の歌わせかたが印象的。今回はドイツの地で培ったさまざまな要素が演奏に宿り、より成熟したメンデルスゾーンが期待できそう。

一方、上原彩子の優勝は、日本人に希望と勇気を与えた。類稀なる集中力に支配された演奏は、世界の舞台へと飛翔するに十分な内容を持つもので、国や民族を超えて多くの人に愛される。彼女のひたむきさ、作品の内奥へと没入していく奏法、鍛え抜かれたピアノリズムは、「夢を追い続けることの大切さ」をも教えてくれるもので、聴き手の心を瞬時にしてとらえる強いインパクトを備えている。

しかし、彼女もまた素顔はおっとりしたマイペース型。日々の過酷な練習さえ「好きなピアノを弾いているだけで幸せ。昔からチャイコフスキー国際コンクールに参加することが夢でしたから、それがかなえられただけで満足。優勝できたことはもちろんうれしいけど、耳の肥えたロシアの聴衆が大きな拍手を送ってくれたことが一番心に残っています」と語る。

彼女が演奏すると、会場は嵐のような喝采が巻き起こり、何度もステージに呼び戻された。その拍手はいまも糧となっている。実は、上原彩子は2度目の挑戦でこの優勝を勝ち取った。1度目に本選でコンチェルトを弾くことができなかった無念を5年間胸に抱き、一から勉強しなおし、再挑戦して夢をつかんだ。以後、ロシア作品を中心にドイツ、オーストリア作品、ショパン、リストなどへと幅を広げ、ベートーヴェンのピアノ・ソナタにもじっくりと取り組んでいる。そして2004年にはイギリスの「ガーディアン紙」が、ロンドンでの演奏を「上原彩子の演奏は本物だ。大きな未来を予感させるアーティスト」と評した。その彼女がベートーヴェンのピアノ協奏曲「皇帝」を演奏するのは、胸高鳴る思いだ。

「私にとってもっとも勉強になるのは実際のコンサートですね。ヨーロッパの指揮者やオーケストラからは、民族性に根付いた音楽の呼吸や感じかたを吸収しています。そこには長い伝統が息づいていますから。そうしたなかから、ひとつでもふたつでも自分に必要なものを見つけられればうれしいのですが…」

上原彩子は本番に強い。大きな舞台になればなるほど燃え、人々に期待されるとそれがプレッシャーにはならずエネルギーになるというたくましさを持っている。「皇帝」でも、新鋭ザンデルリンクと伝統あるオーケストラとがっぷり四つに組み、自信に満ちた演奏を聴かせてくれるに違いない。ぜひ、大きな拍手を送りたい!

伊熊 よし子 (いくま よしこ)

東京音楽大学卒業。レコード会社勤務、ピアノ専門誌「ショパン」編集長を経てフリーに。音楽専門誌、一般誌、新聞、情報誌、WEBなどに記事を執筆。インタビューの仕事も多い。2013年「ラ・フォル・ジュルネ・オ・ジャポン」のアンバサダーに就任。公式本「伊熊よし子のおいしい音楽案内 バリに魅せられ、グラナダに酔う」(PHP新書)出版。



©三浦 興一

Dresdner Philharmonie

Michael Sanderling | Principal Conductor

Kurt Masur | Honorary Conductor

Markus Poschner | First Guest Conductor

Anselm Rose | General Manager

First Violin

Heike Janicke *
Wolfgang Hentrich *
Dalia Schmalenberg
Julia Suslov-Wegelin
Anna Fritsch
Roland Eitrich
Heide Schwarzbach
Marcus Gottwald
Ute Kelemen
Antje Bräuning
Johannes Groth
Alexander Teichmann
Thomas Otto
Eunyoung Lee
Attila Keresztesi **
Sono Tokuda **

Second Violin

Heiko Seifert *
Markus Gundermann *
Cordula Fest
Günther Naumann
Reinhard Lohmann
Steffen Gaitzsch
Dr.phil. Matthias Bettin
Andreas Hoene
Andrea Dittrich
Constanze Sandmann
Jörn Hettfleisch
Dorit Schwarz
Stephan Drechsel **
Johannes Tauber **

Viola

Christina Biwank *
Hanno Felthaus *
Beate Müller
Steffen Seifert
Steffen Neumann
Heiko Mürbe
Hans-Burkart Henschke
Andreas Kuhlmann
Irena Dietze
Sonsoles Jouve del Castillo
Sang Min Lee
Thomas Oepen **

Violoncello

Matthias Bräutigam *
Ulf Prella *
Victor Meister
Petra Willmann
Thomas Bätz
Karl Bernhard von Stumpff
Daniel Thiele
Bruno Borralhinho
Hans-Ludwig Raatz
Chul Geun Park

Bass

Benedikt Hübner *
Tobias Glöckler
Olaf Kindel
Bringfried Seifert
Thilo Ermold
Donatus Bergemann
Matthias Bohrig
Ilie Cozmatchi

Flute

Karin Hofmann *
Christian Sprenger * **
Birgit Bromberger
Götz Bammes

Oboe

Johannes Pfeiffer *
Undine Röhner-Stolle *
Guido Titze
Jens Prasse

Clarinet

Hans-Detlef Löchner *
Fabian Dirr *
Dittmar Trebeljahr
Klaus Jopp

Bassoon

Daniel Bätz *
Philipp Zeller *
Robert-Christian Schuster
Mario Hendel

Horn

Michael Schneider *
Hanno Westphal *
Torsten Gottschalk
Dietrich Schlät
Peter-Paul Graf
Carsten Gießmann

Trumpet

Christian Höcherl *
Csaba Kelemen
Nikolaus von Tippelskirch
Björn Kadenbach

Trombone

Matthias Franz *
Stefan Langbein *
Joachim Franke
Peter Conrad

Timpani

Oliver Mills

* Principal

** Substitutes

Executive Director

Martin Bülow

Orchestra Operations

Almut Placke

Consultant Music Director

Alexandra MacDonald

Orchestra Staff

Gerd Krems
Jens Eichler
Matthias Richter

シェフ就任から十余年、ますます深まる両者の絆。 **チョン・ミョンファン** (音楽監督)
フランス国立放送フィルハーモニー管弦楽団

9月29日(日) 14時 横浜みなとみらいホール

ベルリオーズ: 「ローマの謝肉祭」序曲

ビゼー: カルメン組曲

ベルリオーズ: 幻想交響曲

S¥19,000 A¥16,000 B¥13,000 C¥9,000 D¥5,000

9月30日(月) 19時 サントリーホール

ラヴェル: 「マ・メール・ロワ」

ラヴェル: ピアノ協奏曲 (ピアノ: アリス=紗良・オット)

サン=サーンス: 交響曲第3番「オルガン付」

S¥22,000 A¥18,000 B¥14,000 C¥10,000 D¥7,000



チョン・ミョンファン



アリス=紗良・オット
©Esther Haase/DG

富士通コンサートシリーズ
 甦る誇り高き響き

イルジー・ビエロフラーヴェク (首席指揮者)

チェコ・フィルハーモニー管弦楽団

10月30日(水) 19時 サントリーホール

ドヴォルザーク: チェロ協奏曲 (チェロ: ナレク・アフナジャリヤン)

ブラームス: 交響曲第1番

S¥18,000 A¥15,000 B¥12,000 C¥9,000 D¥6,000

10月31日(木) 19時 サントリーホール

グリンカ: 歌劇「ルスランとリュドミラ」序曲

ベートーヴェン: ヴァイオリン協奏曲 (ヴァイオリン: イザベル・ファウスト)

チャイコフスキー: 交響曲第6番「悲愴」

S¥20,000 A¥16,000 B¥12,000 C¥9,000 D¥6,000

11月3日(日・祝) 19時 ミューザ川崎シンフォニーホール

グリンカ: 歌劇「ルスランとリュドミラ」序曲

ラフマニノフ: ピアノ協奏曲第2番 (ピアノ: 河村尚子)

ドヴォルザーク: 交響曲第9番「新世界より」

S¥18,000 A¥15,000 B¥12,000 C¥9,000 D¥6,000 協賛: 富士通株式会社



イルジー・ビエロフラーヴェク
©Clive Barba



ナレク・アフナジャリヤン



イザベル・ファウスト
©Felix Broede



河村尚子
©寺澤 有雄

俊英ネルソンス&手兵バーミンガム、ヨーロッパで旋風を巻き起こしたコンビがいよいよ来日!

バーミンガム市交響楽団 **アンドリス・ネルソンス** (音楽監督)

11月18日(月) 19時

ワーグナー: 歌劇「ローエングリン」~第1幕への前奏曲

シベリウス: ヴァイオリン協奏曲 (ヴァイオリン: ヒラリー・ハーン)

ドヴォルザーク: 交響曲第9番「新世界より」

11月19日(火) 19時

ベートーヴェン: バレエ音楽「プロメテウスの創造物」序曲

ブラームス: ピアノ協奏曲第1番 (ピアノ: エレーヌ・グリモー)

ブラームス: 交響曲第4番

東京オペラシティ コンサートホール (両日とも)

S¥18,000 A¥15,000 B¥12,000 C¥9,000 D¥6,000



アンドリス・ネルソンス
©Marco Borggreve



エレーヌ・グリモー
©Mat Hennek/DG



ヒラリー・ハーン
©Olaf Heine

サンクトペテルブルグ・フィルハーモニー交響楽団

ユーリ・テミルカーノフ (芸術監督・首席指揮者) ソリスト: エリソ・ヴィルサラゼ (1/28 ピアノ)、庄司紗矢香 (1/26 ヴァイオリン)

2014年 1月26日(日) 横浜みなとみらいホール

9月14日 発売予定 1月28日(火)、29日(水) サントリーホール



ユーリ・テミルカーノフ



エリソ・ヴィルサラゼ



庄司紗矢香 ©Kishin Sinoyama

人のいるところには夢がある。
JAPAN ARTS

お問い合わせ **ジャパン・アーツぴあ** HPでは24時間受付中!

03-5774-3040 www.japanarts.co.jp

twitter @japan_arts

音楽の力で
 復興を!

日本文化振興会

 DRESDNER
PHILHARMONIE

人のいるところには
夢がいる。



JAPAN ARTS



SLUB

Wir führen Wissen.



Dresdner
Philharmonie